

明治村 だより

1996 Winter



初春号



Vol.2

平成八年一月一日発行(季刊)

明治村だより 第二号

目次

ね年郷土玩具展	2
明治と郷土玩具	6
建造物の木目塗り	10
冬の明治村	14

〈表紙写真・福垣量〉

『明治村だより』

第二号(平成八年春)発行のお知らせ

発行時期 本年四月(予定)

申込方法 『明治村だより』第三号(希望の旨及び

ご住所・お名前を明記の上、送料一九〇

円分の切手とともに封書にてお申し込

み下さい。

平成八年一月一日発行

『明治村だより』第二号(平成八年冬)

発行 博物館明治村

愛知県犬山市大字内山一番地

電話(〇五六八)六七〇三三四 千四八四

東京事務所

東京都千代田区紀尾井町三十三

文藝春秋ビル新館七階

電話(〇三三)三三五六六 千一〇二

製作 求龍堂

ね年郷土玩具展

12月23日〜平成8年2月21日 三重県庁舎二階特別展示室
平成八年の干支「ねずみ」に因んだ郷土玩具のほか、
ねずみにゆかりの深い「大黒」や歌舞伎「伽羅先代萩」床下の場の「荒獅子男之助」など、
あわせて100点を展示します。



1 干支の動物と郷土玩具

「子、丑、寅、卯、辰、巳、午、未、申、酉、戌、亥」という十二支は、十干とともに明治時代くらいまでは時を認知する手段として人々の生活に密着したものでした。これは生まれた年・月・日の干支を人の名前やものの名称に冠したことからも推察されます。また、十二支の動物をマスコットの製作し身につけると魔除けになるという習慣は江戸時代の後半からあったようですが、自分の干支の動物が縁起がよいといわれたり、自分の干支から七つめの干支の動物がよいといわれたり、これはその時々で変化する「流行」であったのでしよう。

現在みなさんがよく目にする郷土玩具というと、お正月に神社などでその年の干支に因んで販売されている土鈴ではないでしょうか。現在では「干支」を強く意識するのは正月です。戦後はお正月の記念切手の図柄に郷土玩具が採用されていることが影響しているのか、ここ最近のちよとしたブームにもなっています。

ひとくちに干支の動物といっても、多くの種類の玩

具が作られるもの、そうでないものと様々です。十二支の動物の中でもと民間信仰の対象とされてきた動物、たとえば安産の神である「犬」、農耕神である「馬」などは天候の安定・豊作などを祈るものであったことから、また「虎」は子供の健康を祈るため数多く作られました。一方、実存しない動物「龍」や、日本人にはあまり縁のない「羊」などは、ほとんど作られませんでした。

2 ねずみと郷土玩具

ねずみは十二支の中でも人々の生活により身近な動物でした。もともと、台所や倉庫の穀物を食い荒らされるといふ被害の面での身近さであったでしょう。現在のようにねずみの駆除が徹底され、気密性の高い住宅ではなかったころの生活はねずみと共棲していたといえます。夜になると、天井をグラランドにみたくたかのごとく縦横無尽に走り回るねずみの足音を聞いて育った人も少なくないでしょう。特に住宅においては倉の中へねずみが侵入できないよう柱の床下

部に取り付けた厚い板「ねずみ返し」なるものが弥生時代の遺跡からも発見され、ねずみと人との戦いのあとを垣間見ることができました。

郷土玩具としてのねずみは大黒の傍らに仲睦まじくねずみが配されているように、福徳の神である大黒の使いとして大切にされてきた反面、先程述べたように害獣という面からも作られています。

例えば養蚕など、ねずみにより害を受ける生業では、ねずみを撃退する鈴―これはねずみのすばらしく感度の良い耳を逆手にとったもの―や、ねずみの天敵といわれる猫を守り神とするなどあれやこれやと手を尽くしています。とはいえ、鼠算という言葉もあるように、ねずみは繁殖力が強い動物です。人々はその繁殖力に豊作・繁栄につながるものを感じ、ただの害獣とは見ず、玩具を作って未来の繁栄を願ったのでしよう。

《ねずみと大黒》

ねずみは七福神の中の大黒様の使いとされています。ねずみの郷土玩具を見ても、この大黒様の使用としての姿が多いことに気付きます。大黒に抱かれ

ているものや、大黒を背に乗せているものももちろん、大黒と同じように小槌と袋をもつもの、また、それらと一緒にあったものです。

ねずみが大黒の使いとなったのはどうしてでしょうか。

大黒はもともとインド伝来のマハーカラという神で、仏教に取り入れられて戦勝守護の神、また厨房の神とも考えられており、日本には後者の考えとともに平安時代の初めに伝えられました。最初、寺院の厨房に安置されていたものが、厨房の神として一般にも信仰されるようになり、厨房の中を荒らし回るねずみは、大黒のお使いであると考えられるようになりました。そして前述した繁殖力、繁栄への願いもあったでしょう。大黒は厨房の神から発展して穀物の神、田の神となり、豊作を願う対象となりました。が、広く信仰されるようになるにつれ、福徳全般に御利益があると考えられるようになりました。

また、神仏習合の考えが盛んになるにしたがい、大黒―大國と音が似ているため日本神話の大國主命（おおくにぬしのみこと）と習合し、大國主命が野火に囲まれたときにねずみに助けられたという話からも、大國主命＝大黒にはねずみがつきもの、と考えられたようです。

大黒の最も一般的なスタイルは、頭に大黒頭巾をかぶり、右手に小槌、左手に担いだ袋の口を持って、米俵に立つものですが、とくに小槌はそれだけで大黒を表し得るものであり、小槌とねずみの組み合わせの玩具はいくつも見受けられます。



大黒・岩手県花巻市

《その他のねずみ》

そのほかのねずみの玩具には、金沢の米食いねずみ、名古屋の廻りねずみがあります。これらは動かして遊ぶことのできる「からくり」で、動力のない時代に糸や竹を取り入れて動きを加えた当時としては珍しい玩具です。

当館には数多くの歌舞伎の土人形がありますがそのなかにもねずみに関係するものがあります。仙台藩のお家騒動を描いた歌舞伎「伽羅先代萩」の床下の場―政岡の手に入った連判状を仁木弾正がねずみの妖術で奪い返し忠臣荒獅子男之助の鉄扇を逃れて消え去る―場面に登場する荒獅子男之助や仁木弾正を描いたものです。

その他、今回の展覧会ではねずみ除けのまじないとされた玩具―蚕鈴や招き猫などもあわせて展示いたします。



仁木弾正・埼玉県春日部市

3 竹尾コレクションについて

今回の展示は竹尾コレクションによるものです。これは、愛知県豊橋市に住んでいた竹尾藤市氏が、昭和三十年ころから日本各地を回って収集された郷土人形玩具で、昭和六十年に「遺族からそのコレクション約8000点を寄贈いただきました」。

その内容は、北は北海道から南は沖縄県まで各県の郷土玩具が揃っています。そのうちの大半を占めるのが土人形で、いわゆる「郷土玩具」は量的に少なく、またコレクション全体の2割程を占めるのが地元愛知県で製作された土人形です。数の多さが物語るように竹尾氏の土人形に対する思い入れは、殊の外深く、単なる収集に止まらず、廃絶した人形の型を譲り受け、他の作者に製作を依頼して型の復活を図るなど、土人形製作を存続させるために尽くされました。



ねずみの鈴ひき・滋賀県五箇荘町



ねことねずみとたい・宮城県仙台市



仁木弾正・愛知県



荒獅子男之助・愛知県碧南市



鏡餅ねずみ・名古屋市



大根抱き大黒・兵庫県氷上町

ね年郷土玩具展
12月23日～平成8年2月21日
三重県庁舎二階特別展示室



福ねずみ・鳥根県出雲市



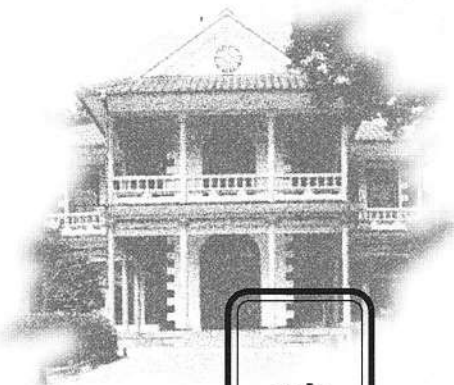
唐茄子ねずみ・埼玉県越ヶ谷市



太鼓乗り大黒・福島県郡山市



ねずみ抱き・滋賀県五箇荘町



建造物の木目塗り

●博物館明治村・建築技師 長谷川 良夫

1 はじめに

洋の東西を問わず、古くから木目の美しさ、面白さが知られていたようで、イギリス、フランス等のヨーロッパの国々では、油性塗料によって建造物の扉などを木目模様にする技法が古くから行われてきました。

わが国における建造物の木目塗りは、古い例では奈良県の国宝建造物当麻寺本堂の須弥壇(鎌倉時代前期)の漆による、木目塗りが知られています。明治維新後に欧米からワニス、ペンキ等の安価な油性塗料が入ってくると、洋風建築ではよく内外ともにペンキが塗られ、木目塗りの多く用いられるようになりました。明治村の建造物では、東山梨郡役所、三重県庁舎、菅島燈台附属官舎、長崎二十五番館などに用いられています。しかし、わが国では昭和にはいると戦

争の影響もあって、木目塗りは次第に行われなくなり、戦後になると代わりに、写真製版による木目の印刷とか、美しい木目の木材を薄く切つて他の木材に張り合わせた、木目調の合板が発達しました。フランスでは現在でも、木目塗りは一般的に用いられており、最近パリに旅行した時に街角で木目塗りをしているところを見かけましたし、デパートの日曜大工道具売り場には、木目塗りの道具を販売しています(写真10)。また、ヨーロッパでは、木目塗りのみならず、石造文法の国々らしく、大理石に似せた塗りなども古くからあります。これらは装飾的なもので、合板では出せない、なかなか味のある仕上げとなっています。ここ数年明治村では、三十年程前に移築してきた建造物の再修理の時期にきており、重要文化財の建造物は国庫の補助事業として保存修理工事が進められています。最近では塗料の分野でも、古い塗装を剥す剥離

2 菅島燈台附属官舎

菅島燈台附属官舎(写真1)は現在の三重県鳥羽

市菅島に明治六年に建設された灯台守の官舎で、設計はイギリスから招聘されたプラントン(R. Henry Brunton)を主任とする、工部省燈台局の御雇外国人達です。

平屋建、椽瓦葺、煉瓦造で正面にベランダをつけた瀟洒な建物です。昭和三十八年灯台の機械化に伴い、無人灯台となったので、官舎は不要となり、昭和三十九年明治村に移築されました。

平成五年の保存修理工事では経年による内外部ベニキの塗り替え、屋根、漆喰壁などの部分修理を実施しました。移築時には内外共に破損がひどく、木部、建具共に修理に伴い塗り替えられましたので、当初の塗りが残っているとは思っていませんでした。塗装工が剥離剤で剥離して、一部ですが幅木の一番下の塗層から木目塗りを発見しました(写真2)。注意してよく見ると、出入口の枠、扉にも当初の塗りが一部見えていました。色についても、移築時の塗装は後世の塗替えられた色に合わせていることが判明しました。今回の工事では、これらの調査結果に基づき、色、模様共に 明治六年建築当初のものに近いものに復元出来たものと思われれます。

3 東山梨郡役所

この建物は山梨県東山梨郡役所として明治十八年に日下部町(現在の山梨市)に建築されました。木造二階建、両翼一階建て、椽瓦葺、外観は漆喰塗籠と

し、建物の角には石造に似せた、隅石積を黒漆喰で画きだし、正面に開放的なベランダを付けています(写真6)。当時の山梨県令藤村紫朗の意向により、日本人工匠が洋風建築を模倣して作った典型的な例です。その後大正十二年郡役所の廃止に伴い、日下部警察署となり、昭和四十年に明治村に移築されました。

明治村に移築の際に後世改変部分の復元が行われ、塗装についても調査され、塗りなおされました。平成六、七年度の保存修理工事中、出入口枠、扉のベニキを剥した際、内部は概ね三回塗り替えられていることが分かり、一番下の塗層からニスの木目塗りが発見されました(写真7・8)。ニスによる木目塗りはめずらしいものです。この塗り工程は、杉材の上油性の着色を塗り、ラックニスを塗り、ワニスを塗り、各々十分に乾燥させた後、ワニスに弁柄、松煙を少量混ぜたもので塗り、ニスが乾く前に櫛形またはゴムヘラのような物で木目状に掻き取つたものと推定されました。

今回の工事では、ニスによる木目塗りまでは工費、工事期間等種々の困難があり、復元できませんでしたが、模様、色については、出来る限り当初のニスによる木目塗りに近いものになりました(写真9)。

菅島燈台附属官舎、東山梨郡役所の今回の工事では、従来塗られていた色より全体に明るい色になりました。三重県庁舎、長崎二十五番館については、まだ当初の塗りが発見されていないので、いずれ全面的な塗り替えの際には、十分に注意して工事を進められ

ば、当初の塗りが発見出来るものと期待されます。

4 木目塗りの工程

木目塗りは本物の木目を描き出そうとしているせいか、柾目、板目、のほか虎杓、玉杓などもあります。

木目塗りの一般的な工程は、先ず木材の節にはラックニスによる節止めを行い、白色ペンキで下塗りを塗り、乾燥後、割れ目にはパテ埋め、サンドペーパーで塗面を平滑にし、中塗りは木目の薄い色に合わせて塗ります。中塗りが十分に乾燥した後木目の濃い色に合わせた、上塗りペンキを塗り、乾燥する前に、櫛形、ゴムヘラ等の道具を用いて木目状に掻き取ります。この木目の柾目を出すには、櫛形の道具を使えばよいのですが、板目とか他の杓目を出すには、ゴムヘラで掻取るとか、筆で描くなど職人さんの工夫がこらされています。フランスのデパートで売られている、半円形の筒の表面に半円形の同心円の溝を刻み込んだ道具は、比較的新しいものと思われれます。これらを使うと比較的容易に板目を描き出せるが、一パタンになりやすい欠点があります。

木目塗りに使う塗料は乾きの遅い従来の油性塗料が必要で、合成樹脂の入った、乾きの早い最近の塗料では、描くのは困難です。



6 東山梨郡役所全景(平成7年修理後)



1 菅島燈台付属官舎全景(平成6年修理後)



9 修理後(扉の下部は当初のニス木目塗りを保存した)



8 当初のニス木目塗り(腰板の部分)



7 工事に発見された扉の当初の木目塗り(薄い色の鏡板の部分は明治村に移築した時の後補材)



4 扉・修理後



3 修理前の扉



2 工事に発見された幅木の当初の木目塗り(白ペンキの下)黄色系の中塗りの上に茶系色で木目を出す。

木目塗りの工程



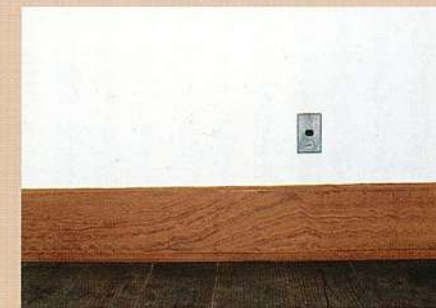
12 楕形の道具で柾目を出しているところ



11 かまぼこ形の道具を回転させながら板目を出しているところ



10 左からかまぼこ形(手製)、同フランス製、楕形(手製)、楕形ヘラ



5 幅木・修理後

